



旧約講解(28)『今神がわれらに望んでおられる事』

今日の聖書本文:ホセア書 6章 1—6節・暗唱聖句:ホセア書 6章 6節

説教者:鄭南哲牧師

- 1「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。
- 2 主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。
- 3 私たちは、知ろう。主を知ることが切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現れ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。」
- 4 エフラムよ。わたしはあなたに何をしようか。ユダよ。わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの誠実が朝もやのようだ。朝早く消え去る露のようだ。
- 5 それゆえ、わたしは預言者たちによって、彼らを切り倒し、わたしの口のことばで彼らを殺す。わたしのさばきは光のように現れる。
- 6 わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜ぶ。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間も主の平安のうちに心も、体も、信仰も 守られ、お元気で過ごせましたか。今日は旧約聖書講解メッセージの28回目になるホセア書という御言葉を持って共に学んで行きましょう。愛するみなさん、今日の礼拝の時までもう長く信仰生活をやって来ている方もおれば、最近教会に通いはじめている方もいると思いますが、どちらに対しても今日の聖書の本文では我々に重要な質問を投げかけています。それは我々が信じている神が我々にいったい何を望んでおられるのかということです。この質問の前に立っている我々に明確な回答を与えて下さっている内容が今日の御言葉であります。

6節を見て見て下さい。“わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜ぶ。”この箇所を他の言葉で解釈しますと“わたしが望むのはいけにえの形ではなく、私に対する変わらない愛であり、全焼のいけにえより、むしろみんな神を熱心に知ることが望んでおられる。”という御言葉の意味でした。

神が我々に望んでおられる事、それは神を人格的に知ることです。

その時も、今日も人の姿はどうですか。正直、神に対する関心よりも、自分自身にもっと多くの関心を持っているのではありませんか。神様はどんなお方であるか、神様が喜んで下さる事は何なのか、神様が望んでおられる事は何であるかに関心をもつより、どうすれば自分がもっと祝福を受けるか、どうすれば自分がより豊かに、楽に、楽しんで生きれるかに我々の関心があるのではありませんか。

もちろん、自分のためのそんな欲張り自体が悪いわけではありませんが、今日のホセア書の本文では我々にもっと大事な関心と質問を持てるように導いて下さっています。“今神が自分に、神がわれらの家庭に、神が我らの教会に本当に望んでおられる事は何なのか、真の主の御心は何か。”でした。この質問こそ、人がこの地上で一度の人生を歩みながら、神様に聞くべき一番大事な質問とその答えかも知れません。ホセア書にはいったい神様の御心が何にか、何をいったい望んでおられるかを明らかにして下さっている大事な御言葉であります。

<ホセアとホセア書>

今日我々が共に読んだこのホセア書は、神の預言者であったホセアを通して神が記録させた御言葉であります。預言者ホセアはイスラエルが北イスラエルと南ユダ王国に分かれた時代に珍しく北イスラエルで用いられた者で、紀元前755年—720年まで、つまり、紀元前722年北イスラエル王国の首都サマリヤが滅ぼされる直前まで働いた神の人でした。同時代南ユダ王国ではアモス預言者が働いてました。ホセアの時代の北イスラエル王国では、ヤロブアム二世王以後、王室内では殺害や陰謀が引き続いてたし、霊的な信仰の面においてもとても墮落してしまい他の偶像崇拜をし、真の神に捧げる聖殿で定期的な礼拝は形式化になってしまったのです。つまり、神に定期的に礼拝は捧げてましたが、イスラエルの民の心はもう神から離れていたの、心から神を愛するの、信じるの、遠く離れていた状態でした。そのような二重的、偽善的な北イスラエルの民たちに神は預言者ホセアを通して語った御言葉が6節でした。

“わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜ぶ。”

愛する信仰の家族のみなさん！本来キリスト教の信仰は儀式的な宗教では決してありません。ある意味でそれがキリスト教と他の宗教との違いでもあります。

キリスト教はある像を作ったり、神殿を建てたりしませんでした。古代宗教たちはいつも目に見える像を作って、人によって作られた物の前で拝んだり、崇拝する宗教行為と宗教儀式をみんな持っていたわけです。しかし、神様はそんなことなどを決して喜ばれません。出エジプト記20章4～5節で神様はイスラエル民たちに十戒を与えながらどう命じられましたか。“あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。”

ところが、徐々に教会の中にもそういう物が入って来るようになり、体表的なのが、中世期ローマカトリックの教会の中では自称‘聖像’という物を作りながら、本来の信仰から儀式中心のキリスト教に変わってしまい、結局墮落の道に歩んでしまった事を我々はどう世界史と教会史を通してよく知っているのではありませんか。

<ホセア書の内容>

ホセアの意味は‘救い’という意味を持っています。ホセアという言葉はヨシュアと同じ根のヘブル言葉として‘自由にさせる’、‘救

まず、

われる’ という意味を持っていた ‘ヤシャ’ から発生された言葉であります。ホセア書は全部14章で書かれています。このホセア書には他の神の預言者たちを通して記録された御言葉と違う独特(どくとく)な内容の面があります。

他の預言者たちはみんな神からの御言葉や命令を聞いてその神のメッセージを口で伝えたならば、預言者ホセアだけは自分が直接不幸な家庭を通して、言いかえりますと、自分の不幸な結婚を通して北イスラエルの民たちに彼らの霊的な状態とそれに対する神のメッセージを伝えた事です。ホセア書の前半1—3章までの内容がその内容にあたります。神様はイスラエルの霊的な姦淫・霊的な浮気の状態を知らせるため神の預言者ホセアに淫乱な女と結婚しなさいと命じられました。

ホセア書1:2-主がホセアに語り始められたとき、主はホセアに仰せられた。「行って、姦淫の女をめとり、姦淫の子らを引き取れ。この国は主を見捨てて、はなはだしい淫行にふけているからだ。」

大変難しい主の命令にも関わらず、ホセアは神の命令に従い、淫乱な女であったゴメルという女をめとられました。

しかし、結婚してもコメルはまた堂々と出て行って浮気をしたり、淫乱な行為をします。連れて来たら、また出て他の男に言ったり繰り返してました。それでもまたホセアはコメルを相変わらず連れて来て、妻として愛します。普通にはありえない話しであり、どうして神の預言者ホセアがそこまで神様がさせるのか理解しがたいところがあるでしょう。しかし、神様はこのホセアの家庭の問題と姿を通して我々に重要な事実を教えて下さっています。

それはもともとあんな淫乱な女コメルと結婚し、妻としてめとり幸いな時を与えられた。しかし、この女はまた夫ホセアをないがしろにし、捨てて何度も他の男に行き行って抱かれましたが、夫ホセアは変わらずに彼女を連れて来て、妻として受け入れた。

このホセアとコメルの夫婦の姿を通してコメルのようなイスラエルに対して夫ホセアのような神様との関係を見せて下さっているのです。すなわち、神様は誓約を裏切り、淫乱な妻(イスラエル)が帰って来て悔い改めれば、彼女を赦し、受け入れ、祝福のところ(家庭)に回復させて下さる事を教えて下さろうとしました。神から離れ、偶像崇拜をしていた霊的に浮気をしていたイスラエルに対しても彼らのように最後まで捨てないで、耐え忍びながら彼らを哀れみ、愛される神である事を見せて下さっているのです。これがまさにこのホセア書が記録された目的でもあります。

2:31 “わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、『愛されない者』を愛し、『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う。彼は『あなたは私の神』と言おう。” 3:1 主は私に仰せられた。「再び行って、夫に愛されていながら姦通している女を愛せよ。ちょうど、ほかの神々に向かい、干しぶどうの菓子愛しているイスラエルの人々を主が愛しておられるように。」

＜神が望んでおられる事＞

愛する信仰の家族のみなさん！神様は心からではないただある宗教的に儀式とか形を決して望んでおられないことを今日の御言葉を通して知る事ができます。生きておられる主の前で献身のない礼拝を望まない、愛のないいけにえを好まない神様の御心が示されています。それでは神様がイスラエルの民たちに望まれたことは何だったのでしょうか。6章6節です。

“わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。”

このメイン箇所を通して我々は3つの点に注目したいと思います。

① 神様がまことに望んでおられることはいけにえ(礼拝)の形より、変わらない愛を願います。

“誠実”だと訳されているこの言葉はヘブル語で ‘ヘセード’ という言葉でその意味は ‘愛’ であります。ですから、神様が信じ、従っている我々に望んでおられる事は愛そのものであることでしょう。我々に向かう神の深い愛を知ってほしい、そして心を尽くし、力を尽くし、知性を尽くして神を愛することが神が神を信じる民に望んでおられたことである事が分かります。

神の人ホセアが神の命令に従って淫乱な女だったコメルをめとって3人の子どもが生まれます。実はその子達もホセアの子であるかもわかりませんが、その後、またコメルは主人と子どもたちを捨てて他の男と浮気をしながらまた淫乱な売春の生活に戻ってしまったようです。そしたら、ホセア書3章2節によると、神に命じられている通り、最初彼女を連れて来た時のようにまた銀十五シケルと大麦一ホメル半でホセアはまた彼女を買い取り、彼女を連れて来てまた妻として受け入れ愛しながら生きていきます。

愛するみなさん、当時も、今日も夫婦の間で一度でもこのような淫乱な事があり、結婚の誓約をやぶたら、なかなか心から赦し、以前のように相変わらず愛する事は難しいのが現実でしょう。しかし、ホセアのようにだれがそんな事ができるでしょうか。人は決して不可能かも知れませんが、ホセア書を通して実は神ご自身が続けて神を背いて裏切っている我々を先に御手を差し伸べて下さり、神に立ち返って来ると、また赦し、変わらぬ愛を持って愛して下さるお方であることを見せて下さっているではありませんか。

イスラエルの民たちは神のみを愛し、信じる約束をやぶり、裏切って今、他の神々を拝んだり、崇拝していた霊的な姦淫した罪人たちでしたが、それにも関わらず、イスラエルの民たちを相変わらず愛して下さり、また救い出し、守って下さるその神の深い愛がどれほどのものであるかをこのホセア書には熱く表されています。その愛の神を我々も深く知り、受け入れ、その神を心から愛を持って信じ、仕えるように主はそれを望んでおられる事が分かります。信仰の形よりも、神とこの信仰と愛の関係を今も望んでおられます。みなさんは最近いかがでしょうか。

② 神はどんな罪を犯したとしても、神に立ち返って悔い改める者たちにはまた包んで下さり、回復させて下さるお方であることを表して下さい。(6章1節)

“さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。”

愛する信仰の家族のみなさん！我々が信じている神様は我らのどんな傷でも癒し、まことの回復もさせて下さる方であると教えて下さっています。もちろん、時には我々が犯した罪やあやまちのため神に打たれたりされる時もありますが、差し伸べて下さる救いの御手を掴み、神に立ち返って来る者たちには必ず彼らを赦し、回復の恵みを与えて下さい。神との約束を破り、神から離れ

偶像崇拜をやった時には主はイスラエルの民たちに‘ロ・アミ’と名づきながら、‘あなたがたはわたしの民ではない、わたしはあなたがたの神ではないからだ。’といわれましたが、また主に立ち返って悔い改めるなら、‘アミ’つまり、“わたしの民である”おっしゃいながら、彼らの神になって下さり、ご自分の愛する民としての約束関係を回復させていただきます。

そして本文、2節を見ると“主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。”と書かれています。この御言葉の意味は、神の回復の即刻性(そっこくせい)、神の癒しの即刻性を約束される御言葉であります。3節を見ると、“主を知る事を切に求めよう。”と言われた後、“主は暁(あかつき)の光のように、確かに現れ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。”と言われました。この箇所の意味は“夜明けがかならず来るように主も必ず来られ、毎年地を潤すために降る雨のように主もかならず来られる。”という意味です。いつも我々のそばにおられる神様は我々の痛みと傷、すべてをご存知です。あいかわらず我々をたずねて下さる神様だからこそそのように語っておられます。

ですから、愛する信仰の家族のみなさん！ 神様を切に求め、いつも最優先に神に立ち返る心と信仰を持ちましょう。我々はいつも自分の努力を全部やってから最後にどうしようもできない時にようやく神に立ち返ろうとする愚かさをもしかして繰り返しているのではありませんか。

神に立ち返る時こそ、神によって我々の傷を覆って癒し、我々を愛されている神の子どもとして本来の自分らしく回復される近道であることを忘れないで下さい。ですから、いつも、人間的な努力をする前に最優先に神に立ち返ろうと信仰の心構えと謙遜な姿勢を保つ我々となりますように切にお祈り申し上げます。

三つ目、いけにえより、主を知る事を願っておられます。

ホセア預言者はイスラエルの民の神様に対する背きと偶像崇拜、不義と不正など、人間の罪を扱う前一つ根本的な問題を指摘しています。それが4章のはじめの部分です。どんな問題でしょうか？4章1節以下をご覧ください。

“イスラエル人よ。主のことばを聞け。主はこの地に住む者と言い争われる。この地には真実がなく、誠実がなく、神を知ることもないからだ。”一番大切な根本的問題は神を知る知識がなかったと言われました。もう一度 6節をみてください。

“わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう。”

イスラエルの民は神を信じる形はありましたが、実際には神がだれであって、どんな方なのかについての知識がなかったという事です。このホセア書の核心は神を知ろうということです。これは2章8、20節、4章1、6節、5章4節、6章6節などで記されています。

神様が我々に願っておられる事は何でしょうか？民たちの根本的な問題は神様に対する無知でした。背きも、偶像崇拜も、不義もみな神を知らないからです。しかし、罪は憎まれても悔い改めて戻れば、そのあらゆる罪を赦し、受け入れてくださるその神様の愛、その尽きない愛(へセード)を知らなかったのです。神が信じる者たちに願っておられるのは形だけの儀式や、献身のないいけにえではなくまことに神を愛する事でした。イスラエルの民は神を信じる、知っていると言いながら、実際にはその神様をあまり知らなかったのです。

同じように我々も、教会の礼拝に出席し、信仰生活を5年になり、10年が過ぎてもまだ神様がどんな方なのか知らないなら、我々もただ形だけの礼拝儀式に満足しがちです。もっと神を知る事に励まなければなりません。“主を知ろう。主を知る事を切に求めよう。”これこそ、我々の人生に訪れるまことの神の愛と回復敬虔することができる幸いな道であるとホセア書は教えて下さっているのではありませんか。

このホセア書の御言葉は我々にも同じく与えられる御言葉です。今日も神様が願っておられるのは我々がどんな方を知って信じているのかをきちんと分かってほしいです。実際我々は神を知っているふりをしながら、ただ回りの話しばかり聞きながら、実際は自分では神様をきちんと正しく、ふかく知ろうとする何の努力もしようとしなかった、それで実際には自分には神を体験した事もなく、いまだに神様がどんなお方なのか知らない場合がたくさんあります。我々が信じている神様はどんな神様ですか？神様は今日も形だけのいけにえより移り変わらない愛を知り、我々にもその愛を持って信じ、従うことを願っておられます。いけにえの形より神をより深く知る事を願っておられます。今日のホセア書は神様の愛がどんな大きいのかを表してくださる御言葉でした。我々が信じている神様は我々を最後まで愛して下さる方であり、主に立ち返って悔い改める者には哀れみを施し、我々を赦し、まことの回復と癒しを与えてくださる方です。

神様をより深く知ろうとすればするほど、我々の生き方が変わり、我々の人生観が変わり、礼拝をささげる姿勢と心構えも変わると信じます。そういうわけで、我々はこの世を生きている間、命のある限り、神様の御言葉を黙想し、学ぶ事にためらってはいけません。ここに我々の熱心を発揮させなければなりません。神様を知る事によって、自分がどう生きるべきなのか、自分はなぜ生まれたのか、これからの人生に何をすべきなのかが見えると信じます。自分の人生の目的と方向を知る事ができると信じます。

みなさんは最近もお忙しいでしょう。仕事や家事や様々な用事や都合などによりみなさんお忙しいでしょう。もしかしたら、生きている間にはずっとそうなるかも知れません。しかし、さらに幸いな人生を送るため、譲ってはいけなな事があります。一生謙遜に主の御言葉を通して、神を知ろうとする努力です。そのためには神を愛する心と信仰がなければ伴えない事をみんなご存知でしょう。また今日から、自分の知識に頼らず、また謙遜に切に神様を知ろうとともに主の御言葉を定期的に読んだり、学んだり、黙想したり、祈ったり、神様に立ち返って、神との関係をしっかり保って行こうではありませんか。願わくは日々、忙しいみなさんの生活の中で御言葉に謙遜に従って神を知る事に大事にし、専念することにより、みなさんの本当の生き方が変わり、神の愛に満たされ、恵まれて生きますようにイエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！！